第1回

「植治の庭」京の維新後の庭造り

造園業「植治（うえじ）」十一代当主　小川（おがわ）　治兵衛（じへい）氏

造園業「植治（うえじ）」十一代当主

小川（おがわ）　治兵衛（じへい） 氏

略 歴：

1942 年（昭和 17 年）九代目治兵衛の次男として生まれる
1962 年　京都市立日吉ケ丘高校特別美術コース　日本画卒業
1966 年　京都市立美術大学（現京都市立芸術大学）卒業
1970 年　十代目治兵衛（兄）より、十一代目小川治兵衛を襲名、
　　当主として現在に至る

おもな作庭：

・住友有芳園
・泉屋博古館
・洛翠庭園
・大安苑「双龍庭園」「水楼橋庭園」「舞妓庭園」「檜林庭園」
・東山浄苑「信の庭 - 五重の義 - 」
・旧有栖川宮邸「平安女学院 有栖館庭園」
・京鐘「百福庭園」
　その他、文化人、個人邸宅の作庭多数

おもな著書：

・『和楽』京の庭　小川治兵衛　（小学館）
・家庭画報「京都・水の庭をめぐる」監修
・『植治の庭を歩いてみませんか』京都の自然と文化 ―七代目 治兵衛と植治― 監修
・『すきっと』特集「造・つくる」人間復興の庭造り 小川治兵衛（道友社）　　他多数

「植治の庭」京の維新後の庭造り

造園業「植治」十一代当主　小川　治兵衛 氏

皆さん、こんばんは。私、植治十一代目の小川治兵衛と申します。よろしくお願い致します。今日は庭の話です。気楽に聞いてくださいね。その前に私の方の庭の説明をさせていただきたいと思います。

私の家は、いまから約二六〇年前、というと江戸の中期、宝暦年間に造園を創業致しております。創業者、われわれ「元祖さん」と呼んでおりますものは、実は侍だったんですね。

当時は身分制度というものがございまして、侍というのはものすごく高い地位なんですね。その高い地位を捨ててまで造園を家業とする、よほど造園大好き人間、非常に造園に対しての熱い思い、情熱というものがあったということと、お客さんへの対応が非常によかったということで、以来、元祖の名前が治兵衛という名前でございましたので、そういった治兵衛という名前と、その精神面を引き継ぎまして、私で十一番目を数えます。

私どもの、こういった庭の仕事は「小川治兵衛作」というかたちで残っているものが非常に多いわけですけども、私どもは決して私たちの庭づくり、作品づくりにお伺いしているわけではないんですね。

庭というものは、必ずつくらせていただく方がいらっしゃいます。これを「施主」と言うわけですね。施主の方からご注文を受けますと、いかにこの施主の方にお喜びいただく庭をつくるかというのが一番の目的なんです。

そこで事前に、この方のご意見、ご希望、ご趣味、あるいは使われるとなると、その方の家族構成、そしてお客さまをお招きになるということになると、その方の社会的な地位、そういうものを考えます。そして一番肝心な、その庭が何のためにつくられるかという目的を十分こちらが事前に把握して、おつくり致します。

出来上がった庭は、私どもの作品ではなくて、施主の作品をわれわれが代行させていただく、なり代わってつくらせていただくということで、出来上がった作品は施主の作品であるわけです。

私どもの庭の仕事は、こういう素晴らしい部屋の中の作業ではないんですね。いつも外、アウトドアです。アウトドアには何があるかというと、春夏秋冬という季節があるんですね。季節の中での作業なんです。

今年の夏はものすごく暑かったですね。こういう真夏の暑さの中での作業、また冬も寒かったです。今年はこの一月から池をつくっていたので、非常に寒い中での池仕事、本当に手がうずくような、そんな作業なんですね。極寒の寒さですね。この夏の暑さ、冬の寒さの中での作業です。

ところが、日本というのは素晴らしい国ですね、その間に春と秋というものがあるんですね。この春と秋、毎日ではないんですね、数日ずつですけれども、外で仕事をしていてよかったなという仕事冥利を感じる、そんな仕事でもあります。これがあるからこそ、夏の暑さ、冬の寒さが辛抱できるのではないかと思うんですね。

この夏の暑さですけど、毎年どんどんと地球が温暖化現象、ヒートアップ致しまして異常気象になっていますね。それだけに、いま申したように地球の環境、あるいは、そういったことに皆さん非常に関心度が高まっています。これは日本だけではないです。全世界で高まっているんですね。

夜、空を見ますと、たくさんの星が輝いていますね。地球もまた向こうから見ると、その星の一つにすぎないわけです。でも、それだけたくさんある星の中で、地球というのは唯一の星なんですね。「唯一の」というのは、私たちのような生命を持つものがたくさん存在しているんですね。これは人間だけではありません。いろいろな動植物がこの地球には存在しています。いわゆる生命を持つもの、生命体です。

最初から地球に、こういった生命体があったというわけではないんですね。何かの星が超新星爆発致しまして、こんな火の玉状態では決してそんなものは存在しない。生命が存在するということになると、おそらく、いまの気候が保たれたときに、この生命が存在したんだろうと思うんです。

でも、そのとき手品のように生命が出てくるわけではな

いんですね。やっぱり生命がつくられるというと、その材料が必要なんです。

その材料というのは、地球本体であったわけです。そして、そのときの地球はどんな地球であったかというと、ほとんどが海の水と大陸、大地だったんです。大地も生命がありませんから、草木の生えない不毛の大地だったんですね。そこに川の水があったんです。

だから地球には、海の水と川の水、そして地球の大地があったわけですね。それと空気、酸素といったものがございます。空がございますと、空には太陽、地球、月という絶妙の距離感があるんですね。そして雲がございます。雲がある以上は、雨、風、霧、雪、霜といった気象現象があったんです。隕石も飛んできたと思うんですが、そういった中から何かが化学反応、あるいは太陽の光合成、潮の満ち引き、そういうもので偶然か、必然か、この生命体が生まれたと考えられるんです。それがどんどん増殖、進化致しまして、最も進化したのが私たち人間だそうでございます。

この私たちは、いま申しました夏の暑さ、冬の寒さを、こんにちでは、このボタン一つ、冷暖房で対処できます。ところが、他の動植物はどうしているかというと、例えば渡り鳥、ツバメなど、ついこの間まで飛んでいたのが、いま見当たりませんね。

というのは、ツバメというのは初夏に飛んできて、そしてそこで繁殖し、子育てし、いまごろ、また自分の適温の国へ小さな羽で何千キロとなく飛んでいくんですね。また逆に、冬鳥、いま飛んでくる鳥がおります。

また、これは鳥だけではないんですね。魚もそうです。暖流、寒流に乗って、この日本近海が最も自分たちに適したときに、日本近海にやってくるんですね。それをわれわれは、つかまえて、これからはサンマのシーズンです、サンマがおいしいでっせとか、冬になると寒ブリが

うまいとか、そういうものをつかまえて食べているんですね。魚たちは生きるために来ているのに、つかまえられているわけなんです。

こう考えてみますと、人間以外の動植物は全てが、この地球の環境、あるいは、そういった気候というものに順応しながら、あるいは自らその中に溶け込みながら、合わせながら生活しているんです。人間も初期の段階では、そういった自然の中で順応しながら、そして、他の動植物とあまり変わらない生活をしていたと思うんです。

ところが、どういうわけか人間だけは衣食住、全てにおいて、文明・文化というものを持ち合わせるようになったんです。特にその住まいの環境、これが甚だしいんですね。

最初は自然のジャングルの中で、雨が降ってきたと言うたら洞窟の中に逃げ込んでいたんです。でも、その洞窟がちょっと窮屈じゃない、ちょっと掘ったろかと言って掘る、広くするんですね。

また、外へ出ると、ちょっと日当たりが悪いと、この木を切ろうかと言って、ああ日当たりがよくなったと。ちょっと狭いやないか、もっと木を切ろうやないかということで、どんどん地球の環境を破壊しながら、われわれは自分たちの理想郷をつくり上げました。

こんにちでは山は削るは、川の流れは変えるわで、どんどんと自分たちの理想郷をつくり上げた。どういう理想郷かというと、自然のジャングルを人工化ジャングル、鉄とガラスとコンクリートのコンクリートジャングルに変えたのです。そして、そこに、私は人間の最大の英知だろうと思うものの発明と発見を駆使しているのです。

どういうことかと言うと、水平と垂直というものを持ち合わせることによって、古来より、いろいろな構築物をつくり上げてきたのです。古くはピラミッド、あるいはパルテノン神殿、

あるいはスフィンクスや、日本におきましては法隆寺の建物など、これは水平と垂直がなかったら、とっくに倒壊している、または建てなかったと思うんです。

こんにちでは、それがどんどんとエスカレートしまして、地上何十階、何百メーターという大ビル群をつくったのです。それが、この大都会のそういう街並みなんですね。それが、いま皆さんのお住まいのマンションであったり、オフィスであったり、ホテルであったり、いろいろな構築物が立っています。

一歩外へ出ましても、そこには地球の表皮の地べたが何もなくなってしまいました。そこにもアスファルト、レンガタイル、コンクリートなどを流しまして、ここでも、やはり水平と垂直を駆使致しまして、道路、地下鉄、高速道路などをつくり上げたんですね。

生活面におきましても水平と垂直によって、時間や単位を表すようになりまして、人間というのは数字、文字、記号、数式というものを持ち合わせるようになって、それを複雑に絡めましてデジタル化社会をつくったわけなんです。

われわれは、このコンクリートジャングル、デジタル化社会の中で、本当は快適に過ごしているはずなのですけど、何かしら心の窮屈さを覚えるのです。それはどうしてでしょうか。

それは、ふと見渡すと私たちの周りから、自然がなくなってしまったんです。なってしまったのではなく、自分たちが追っ払ってしまったんですね。でも人間って、おかしなものですね。それだけ追っ払った自然を、自分たちのつくった、このコンクリートジャングルに、呼び戻そうとするんです。

でも、自然というものは、決して私たちの手でつくれるものではないというのが私の持論です。それは誰がつくるのかということになるわけですが、自然は自然がつくるものだと思うの

です。何十年、何百年、何千年、時には何万年かかって、自然のサイクルをつくるわけです。自然のサイクルとは何かというと生命の循環機構、生命の再生機にほかならないのです。

でも、そんなややこしいものは要らん、取りあえず、いま緑がないのだから、自然の香り、エッセンス、木とか草とか花を植えてくださいと言う方々に、そういうものをお植えするのが私どもの庭の仕事ではないかと私は考えております。

庭をつくるということになりますと、庭は材料が必要ですね。庭をつくる材料はどんな材料かというと、皆さんよくご存じの材料ばかりです。まず土が必要です。そして、岩や石、木や草や芝生やコケ、そういったものが必要ですね。地球の大地にあるもの全てが造園の材料になり得るものです。

また、そこに岩組をして滝をつくる、あるいは池をつくる、またはプールをつくったり噴水をつくる。また、お茶をなさっておられる方は蹲（つくばい）をつくって、筧（かけい）をつくる、これには水が必要です。だから、地球の大地と水が必要なんです。

また、私が最初に申し上げたように、われわれのつくる場所はこういう部屋の中ではなくて、アウトドア、屋外でしております。外には何があるかというと、もちろん空気、酸素がございます。そして空がございます。

空がある以上は、太陽、月、星、雲がございます。雲がある以上は雨、風、霧、雪、霜といった気象現象があるのです。だから、われわれの庭の材料は、地球の大地と水と空が材料になっております。

でも、おかしいやないかと。生命をつくるものと同じ材料を、なんで使うんだということになるわけですけど、私はこう考えております。例えば今年の夏、非常に暑かったですね。だか

ら皆さんは海や川にお遊びに行かれたと思うんです。海に行かれた方、その大海原をご覧になったとき、あるいは海岸で繰り返して波が寄せてくる、そういうものを見たとき。川に行かれた方、滝があって渓流がさらさら流れている、そういう光景を見たとき。これは、いつまで見ていても見飽きないんですね。そして時を忘れて見とれているのです。

また、これからのシーズンと申しますと、いろいろな木々が紅葉します。特に京都はモミジが紅葉するのが非常に美しくて有名ですね。こういったモミジの紅葉や、いろいろな木々の紅葉、あるいは春の満開の桜をご覧になったときや、あるいは、いろいろな草花が草原で咲いているのを見て、そういうのを見たとき思わず皆さんは、うわぁ、きれいやなぁと笑みがこぼれるんですね。おそらく、そういう花を見て怒っている人は、まぁ、いないと思うんです。

私は犬を飼っております。夕方帰りますと、犬は僕に散歩に連れていってくれというわけですね。私は平安神宮の近くの神宮通に住んでおりますので、その犬を毎日のように夕方、今日はここへ来ましたので行きませんでしたけども、毎日、平安神宮の方へ連れて行くんです。

そうしますと、平安神宮の方は非常に空が広く見えます。広くきれいに見えるんです。夕方で、そうしたら夕焼けが、ものすごくきれいなんですね。特に渓流橋から落ちる夕日や、京都会館の前の、あの広い道からこの街並みへ落ちる夕日が、すごくきれいなんです。実は犬を散歩するよりかは、僕はその夕焼けを見に行くんです。

また、私の家にでかいクスノキが一本あるんです。これが、また散らかるんです。それで、毎日、掃くんです。言うときますけどね、クスノキをあまり植えたらあきませんよ、ものすごい散らかりますから。

このでかいクスノキがあるので毎日、庭を掃くんですけども、うちの店の若い人が来るまで

に掃くために、だいたい四時半か五時ごろ起きます。まだ真っ暗です。そうしますと真っ暗ですけど、そのころになると朝焼けというものが見られるんですね。朝日の出るちょっと前。空の真っ黒の中の雲があかね色になって、そしてピンク色になって、だいだいになって黄色になって朝日が出るんです。こういった朝焼け、夕日、夕焼け、そういうものを見たとき、この宇宙の天体ショーを見たときに、思わずその荘厳さに、ただただ呆然と眺めるんですね。

このように海を見る、山を見る、空を見たときに、そこには見飽きない光景があるんです。そして、いつまでも見ていたいという気になるわけです。それは、そういうものを、いっとき見た後、何かしら頭がすかっとして、何か心がリフレッシュしているんですね。ご経験あるのではないかと思うんです。それはどうしてでしょうか。

どうも私たちの体の中に、その生命ができるとき、この地球の大地と海と空というものが組み込まれているのではないか、だから、こういう自然のそういったものに遭遇したとき、お互いがお互いに共鳴し合って何かそれぞれが、ふるさとに帰ったような、そういった癒やし、癒やされるものがあるのではないかと私は考えております。

だから、私は庭をつくるとき、この地球の大地と水と空というものが材料ですから、同じ材料を使って庭をつくるならば、あまりでかい石を、ぎょうさん立てて圧迫感を感じるような庭ではなくて、もっと自然の優しさ、豊かさ、素晴らしさ、あるいは素朴さというものが、いま皆さんの周りからなくなっておりますので、そういうものを皆さんのおそばにお届けしようというのが、私ども植治の庭でございます。それが基本姿勢です。ここまではコマーシャルと思っていてください。

私どもは約二六〇年間、京都というホームグラウンドで庭をおつくりしておりますので、ち

ょっと京都の庭の材料のお話をしたいと思います。簡単な地図を書いておりますから、見ながら聞いていてください。

京都は昔から山城の国と言われております。なぜかと申しますと、三方が山に囲まれております。東山、北山、西山と、そして南だけが開けた、非常に城塞の長けた地形から山城の国というわけなんですね。

この山々、非常に形が美しく緑が豊かです。この山々には昔は、たくさんのアカマツがありました。また、スギ、ヒノキといったものも、たくさんございまして、ヤマモミジ、ヤマツツジがたくさんございました。また、そこにはコケなども豊富であったわけです。

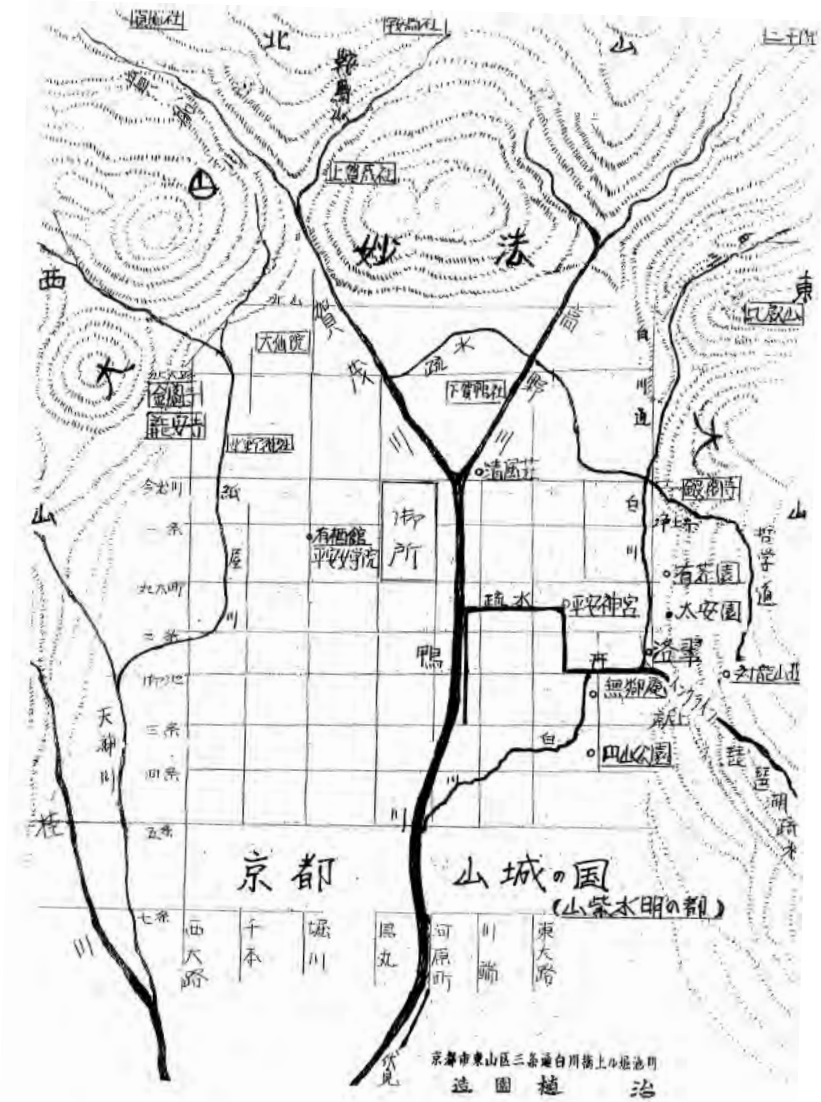
里の方には、たくさんの竹やぶがありました。だから、京都では春、モウソウチクの下から出るタケノコと、秋のアカマツの下から出るマツタケが、実は名産であったんです。

このアカマツ、あるいはスギ、ヒノキといったものが実は、モミジ、ヤマモミジもそうですが、庭の材料として一番大切な主木としておりました。だから、こういった山々は非常に緑豊かで、きれいな山なんです。

こういった美しい緑の山々は、また、一滴一滴、素晴らしい水を産していたものです。それが川を形成致しております。それが白川であり、高野川であり、貴船川であり、そして賀茂川なんですね。

京都は全体が、おわんの形で盆地になっておりまして、そういった川が盆地の一番低いところに合流致しまして大きな川、鴨川を形成致しております。だから、昔から、この山と川、非常に風光明媚な地形から「山紫水明の都」と呼ばれていたわけです。

この山紫水明の都の言葉はいいのですけど、実情を申します。京都の夏というと、だいたい



京都　山城の国（山紫水明の都）

毎年七月十七日、祇園祭の山鉾が出る、あの日から本格的な真夏がやってくるんですね。それまでは何となしに、ぐずぐずとした梅雨模様です。あの日から不思議と、からっと京都には夏がやってきます。

京都に夏がやってくると、この鴨川、鴨川の特に西側に二つの風物詩が現れます。一つは夕刻、少し暗くなると河川敷に。あれは不思議なものですね。広くても狭くても等間隔にカップルが並んで、暗くなるのをこのごろは待たずに、楽しい行いや語らいがされているんです。おそらく皆さん経験があるのではないかと思うんです。

二つは、鴨川の西側というと、たくさんの料理屋さんがあるんですね。料理屋さんの裏が鴨川です。鴨川と料理屋さんの間に小さな川、高瀬川というのが流れております。それをまたぐようにして、物干しのような形のもので、川床というものが出るんです。

ここでも夕刻になりますと、各お料理屋さんは、ご自慢のお料理をそこに出されて、お客さんをお招きされるわけです。それで、お客さんはその京料理などを舌づつみながら、芸妓さんとか舞妓さんのお酌と踊りを見ながら、そのとき、前に流れる鴨川を見ながら食すというというのは非常に風雅な都人の世界なんですね。

そのとき、前に流れる鴨川をよくよく見ると、鴨川というのは割と水が少ないんです。真夏になればなるほど雨が降りませんから、だんだん水が少なくなって石ころが見えてくるわけです。時には、この中洲ができて草の生える川になります。草川になるんですね。

ところが、いったん大雨や台風が来ますと、各河川から、どっとその水が鴨川に合流致しまして、それが濁流となって昔は、これがよく氾濫して京都中水浸しにする、疫病がはやる、大変な暴れ川であったわけです。あるときはめちゃくちゃある、ないときは、からからになると。

こういう水事情で、われわれ庭をおつくりしていました。

水の便のいいところというと源水地ですね。源水地というのは山の近郊です。山の近郊は、もともと神社仏閣の所領地になっておりまして、この場合、山自体、川自体、滝自体が信仰の対象物としてお祭り、お守りされていたわけです。

こういう場合、神社仏閣では、その庭をつくって滝をつくる、池をつくっても、またそこに、源水地で水がありますから、その水は容易に使えるのですけども、われわれの盆地の真ん中で家を建てて庭をつくって滝や池をつくっても、肝心の真夏になると水が流れてこない、あるいは湧いてこないんです。

水というものは動いていればこそ生きているのです。動かなかったら腐ってしまうんですね。腐るだけではなくて蚊の幼虫やら、いろいろなものが湧きます。非常に不衛生になって、ボウフラや何かが湧くわけですね。

皆さんもご経験があると思うのですけど、この京都の夏は非常に蒸し暑いんですね。蒸し暑いというのは湿度が高いということです。だから、湿度が高いということなのに、そこに、またこの水たまりがあると、余計じけじけした、病人の出やすい環境から、昔は京都で、家の中で滝や池をつくっては家相に悪いと言って戒められたわけです。

しかし、当時は都であったので都人は、でも、そんなに言わはっても、家を建てたら、やっぱり庭が欲しい、庭には、やっぱり滝があったり池があったり、そういう庭が欲しい、そんなに水がないなら、自分たちで水つくりましょうと言って、水をつくったわけです。

どんな水をつくったかというと「枯山水」という方式の水です。皆さんご存じでしょうか、枯山水。これは龍安寺の石庭、あるいは大徳寺大仙院の石庭などは、いま世界の文化遺産に登

録されております。

この場合は、枯山水というのは石とコケと白い砂、白川砂で構成されております。そして、この場合、石とコケというのは島とか大陸を表しておりまして、それが庭全体に白い砂をまくことによって、石や大陸を縁取るように、なぞるように、水模様、波模様を付けて、この白川砂は大海とか水を表している。水にこの白い砂を見立てているわけですね。

見立ての水となりますと、京都の風光明媚なところ、保津川下りで言うなら、保津峡というのがあります。この保津峡を昔はよく、この庭の中で再現したのです。この場合の水はどうしたかというと、先ほど申し上げた京都の各河川は素晴らしい銘石が取れるんです。石が取れるんですね。

代表的な枯山水の石庭、龍安寺

例えば白川から白川石、浄土寺川から浄土寺石、高野川から高野石、貴船川から貴船石が取れます。そして、鞍馬の山から鞍馬石が取れるんです。非常に銘石があるわけですね。「銘石、銘水を産す」という言葉があるように、素晴らしい石が取れたのです。

ところで、この中央に流れる大きな川、鴨川ですけれども、昔は、ものすごいでかい、真っ黒けの黒光りの大きなマグロが取れたんです。日本一のマグロが取れたんです。おそらく、みんな、うそやと思ってはるんですけど本当に取れたんです。

でもね、うそやと思った人は、いまちょっとおなかが減っているんでしょう。大トロ、中トロ、トロ鉄火の、あのマグロを思ってはると思うんですが、いま石のお勉強中でございます、真黒石でございます。真っ黒けの石。これが取れたんです。鴨川の真黒、覚えておいてくださいね。それから、東山からも石が取れます。非常に石質が豊富なことから、これを鴨川の七石と言われています。

昔は「河川法」がございませんでしたから、こぶし大から少し小さめの石を拾ってまいりまして、自分たちのつくった保津峡の中に、この石をまき込むのです。そうしますと、川の中に石がまかれただけで、何となしに水の涼感を覚えるんですね。これはどうしてかというと、常日頃、石ころだらけの鴨川を見ているので、どうも連想ゲームをしているのではないかと思うんです。

そのほかにも、都ではたくさんの水がないので、いろいろな工夫を致しておりますが、今日は時間の都合で、これぐらいに致します。

本当は、都人はこういった見立ての水ではなくて、夢があったんです。どんな夢かというと、京都のお隣、滋賀県に日本一の水瓶、琵琶湖があります。その琵琶湖から水を持ってこられへんかという夢の構想を抱いていたわけです。その夢の構想が実現するのは、実は都人から離れて京都人になってから、京都が明治になってからです。そのことをちょっとお話します。

その京都になってから、明治時代ですが、この明治時代のちょっと前と申しますと、去年ちょうどＮＨＫの大河ドラマで『龍馬伝』がありましたね、あの時代です。あの時代は日本国中が、尊皇か攘夷か倒幕かで揺れ動いた時代ですね。その中心が京都だったんです。

だから、毎日のように新撰組と薩長、あるいは長州藩とか土佐藩とかで新撰組と斬り合いがあったわけです。たびたび火災も起こっています。禁門の変、どんどん焼けという京都中を焼き尽くすような火災が起こっていたわけです。

こういった争いとか火災、こういうものが、やっと鳥羽・伏見、楠葉の戦いをもって終わり、そして、新しい政府、明治政府ができました。非常に京都の人たちは、都人は喜んだんです。

ところが、喜んでいるのもつかの間、もっとすごいことが起こりました。それは何かと申しますと、確か明治二年だったと思うんですけど、明治陛下が、ちょっと東京に視察に行ってまいりますと言われたまま、いまだお戻りにならないわけなんですね。不思議なことですね。そのときにちょうど京都をポケットに持っていかれたのか、東の京都をつくられたのが東京都なんです。

天皇さんがおられないということで、京都で手広く商売をしていた人たちが、みんな東京へ移り住まわれます。そうなると、そこに働いていた従業員は解雇されるわけです。ところが解雇されても、ほかに就職ができませんから、仕方なく、それぞれのご郷里、大阪や神戸、奈良などに帰っていかれました。だから京都は、明治一〇年代というのは焼け野原、過疎化、衰退の一途をたどったわけです。

ところが、やはり明治一〇年代の中ごろぐらいから、京都をもっと復興させようという機運が生まれてきました。機運が生まれるんですけど、何をどうしたらいいか分からないわけです。だから、当時の知事、あるいは京都の名士の方々は毎晩のように大激論をされました。何をどうしたら京都を発展させるようにできるだろう、近代京都をつくるには、どうしたらええんやろと、みんなが考えたわけです。

「京の都」の「の」が取れたんです。それまで「京の都」だった、この「の」が取れたから京都になったんですね。「の」って何やろといったら脳みその脳なんです。この脳みその脳は政治経済、これは東京に行ってしまった。ところが、もう一つ残っていたんですね。この千年

間の文化があるじゃないか、この文化を生かした、まちづくりをしようということになるんです。

でも、文化だけでは京都は、そんなに発展できへんやないかと。もうちょっと活気のある、まちをつくって、そして文化を花開かそうと。ちょうど開国日本で、西洋からどんどんと文化が入ってきているので、西洋の文化都市に見習った国際文化都市にしてはどうかという大ビジョンが打ち立てられました。

でも、言葉で言うけども、それまで、ちょんまげを結っていて鎖国だったでしょう。そんな西洋の文化都市は見たことないと。だから視察団が行って、その報告がありました。それが一二〇年ほど前です。

国際文化都市にするのには、まず生活するのにはガス、水道、電気が完備している。一〇〇年たった、こんにちでは当たり前ですが、一二〇年、一三〇年前にはなかったんですね。それから生活するのには学校、図書館、劇場、役場や市場など、そういう生活ライフラインが非常に整っていると。

また、国際文化都市ですから道路、乗り物、宿泊施設が十分に発達して完備していると。それから治安がいいということ、衛生的であるということ。中でも、その都市、まちに、幾つそういう文化施設のようなもの、公園があるかによって、その都市まちの文化度が分かるとさえ言われました。

ところが、当時は何もなかった、ないに等しいわけです。だから、こういう素晴らしいまちをつくるのには、どうしても必要不可欠なもの、足らないものがありました。それは安定した水が足らなかったのです。

そこで、明治一八年に着工致しまして明治二三年に完成する、この琵琶湖疏水こそ、近代京都をつくる大原動力となったわけです。まず、琵琶湖疏水を一番に、この水ですね、水道水、生活用水、命の水に変えたわけなんです。

二番目には、日本で最初の水力発電所を設けまして、これから来る新しい機械の電気を動かす科学の水に変えました。だから京都で、日本で最初の電車、ちんちん電車を走らせたり、街頭をともしたわけです。

三番目は琵琶湖の取り入れ口が滋賀県の大津の方で、そこから、いろいろな物資を船に乗せて、滋賀県は、ここから琵琶湖でいろいろな物資が来るわけです。それをここから船に載せて出来たての東山のトンネルを抜けて来ると、蹴上まで船でそれが運ばれてくるのです。

ところが蹴上で、いったん疏水がなくなっているのです。そこでトロッコを沈めまして、その船をトロッコに載せて、下の動物園の裏の疏水まで下ろすわけです。これを「インクライン」と申します。そして、その船が今度は、ずっと伏見まで行く運河の水に変えたのです。

ところで、この琵琶湖疏水を使って、実は都人の夢がここでかなってきます。この琵琶湖疏水を使って、実は初めて庭をつくらせていただくのが、この平安神宮と無鄰菴なんですけども、いずれも私の曽祖父である七代目小川治兵衛が作庭に当たらせていただきました。

順番として、最初に取り掛かったのは無鄰菴ですから、無鄰菴から先にお話させていただきます。

無鄰菴と申しますのは、山県有朋（やまがたありとも）公という時の総理大臣であったり、内閣を持っておられた方の別荘庭園としてつくられるわけですけども、この山県さんにおかれましては、その生涯に三つの無鄰菴をおつくりになられました。

一つは、山県さんは、もともと山口県萩市出身で、そこの吉田山というところに小さな庵を持っておられたそうです。それが「無鄰菴」という名前であったわけです。最初に京都にお出ましになったのが、明治二四年のことでございますが、そこに居を構えられて、無鄰菴とされました。

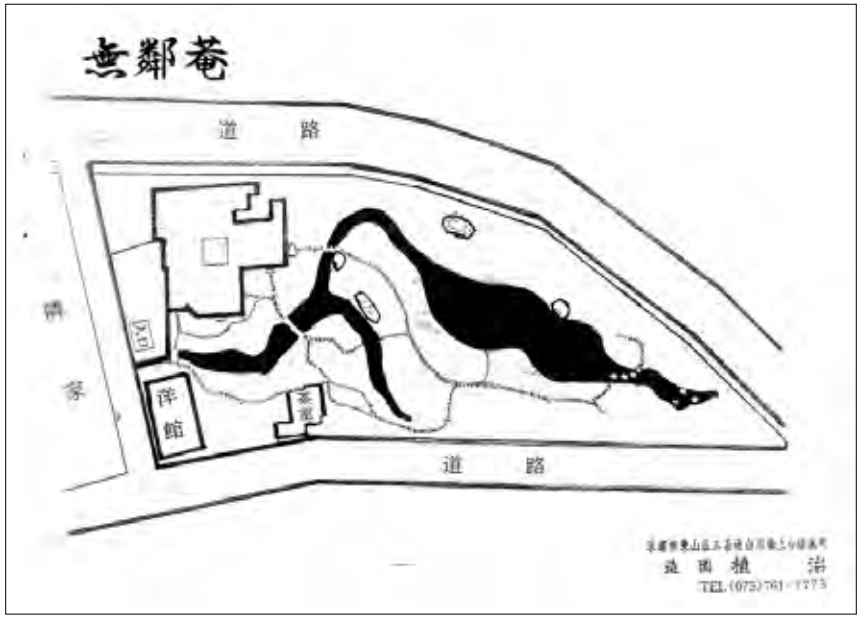
その無鄰菴は木屋町二条下がったところに、いまは「がんこ寿司」になっているところです。皆さん、ご存じでしょうか。いま「がんこ寿司」になっているところの庭が、山県さんが非常にお気に召したのです。

ところが、いまのお庭ではありません。いまの庭は、戦後、大岩さんという持ち主が、つくり替えられたお庭です。それ以前の庭が、山県さんが非常に好まれました。それは、どういったことかというと、次に南禅寺につくる無鄰菴の、そこにたくさんルーツがあったのです。

その木屋町二条下がったところの無鄰菴には、京都で最初の疏水が使われました。この疏水は琵琶湖疏水ではありません。もっと昔に疏水があったんです。それは、一六〇〇年代にさかのぼり、秀吉の時代です。

秀吉が京都で大仏殿をつくるということになりまして、大仏殿をつくるのには、たくさんの、いろいろな物資が必要だったんですね。その物資を運ぶ運河をつくったのが角倉了以（すみのくらりょうい）であるわけです。それが高瀬川なんですね。

その源流に角倉了以のお宅、居を構えられたわけです。そして、そのお宅の中の庭に、この高瀬川の水を使って池をつくられました。この池が川のような池、流水池をつくりました。これが非常に山県さんのお気に召されたわけです。それまでの池は、たまりの池なんですね。さんずい偏に也、これは水也というわけですね。水がたまっているのが池だったんです。



無鄰菴

この池は流水、流れていく流水池で、そこの場所は東側が鴨川ですから非常に開けている、視野が広く、そして非常に明るいわけです。それから、向こうの方に東山が遠望できます。さらに、そこに大空が入ってきます。まさに、この地球の大地と水と空というものが、ここで一体化した庭がそこにあって、それを山県さんが非常にお気に召したわけなんですね。

ということは、角倉了以と山県さんとが共通点があります。この角倉了以は、なぜその庭を好んだかというと、実は角倉了以は、皆さんご承知だと思うのですけども、秀吉から御朱印船状をもらって南蛮貿易をしていました。これは桃山時代です。

当時、日本から外国へ行ける人は本当にごく限られた人でしかなかったわけですね。それまで、ほとんどの日本人は島国根性です。だから、池は、たまっていて当たり前だったのです。

ところが、この方は南蛮貿易で世界を視野に入れておられますから、そんなところで、たまっていられませんわね。だから流してしまおうということで、そういう流れ、あるいは風通しのよさ、見通しのよさ、常に外に目を向ける、そういうお方であったから、そのお方の庭がそれであって、それと山県さんが非常に類似したことがあったわけですね。山県さんも当時、やっぱり外国に行かれたこともあったのです。

この庭が、これだけお気に召したのですけども、付けられた名前がいけなかったですね、無鄰菴、隣のない庵。ところが木屋町二条下ルというのは、いまでも、ものすごい繁華街でしょう。隣がないどころがあり過ぎて困っているようなところです。だから、ちょっと環境が悪いということで、ちょっと、ほかをということだったのですけども。

実は、この木屋町二条の無鄰菴を七代目にご紹介していただいた方があるんです。ここも七代目が、ずっと山県さんのお手入れをしたり、庭を直したりしていたところです。ご紹介していただいた方は実は前田侯爵さんです。前田侯爵さんは、いまの南禅寺の一番西の方に山門がございます、その横は、ちょっとこの前まではラブホテル街だったんです。その以前が、その前田侯爵さんのお宅でありました。

その庭を七代目は明治二二年から明治二四年か明治二五年までをかけて、つくっております。だから、おそらく、山県さんをご紹介いただいたということは、山県さんは、そのお庭に行かれたということが考えられます。その次につくる南禅寺の無鄰菴は、そこから歩いて一五〇歩のところです。そこの辺は、いまでも閑静なところです。だから、ここはいいところやなと思ったに違いありません。

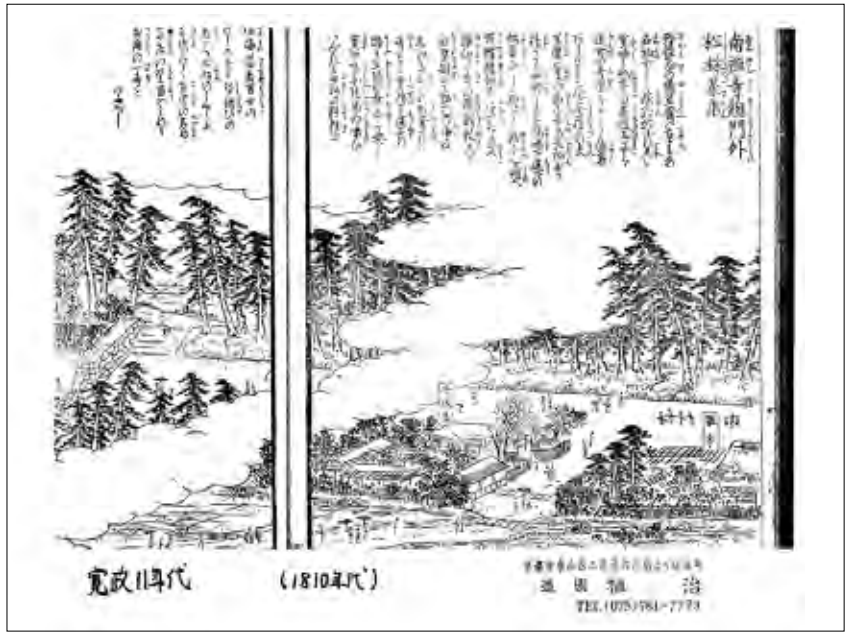
いよいよ、この南禅寺の無鄰菴をおつくりするわけですけど、この南禅寺の無鄰菴は、もともとここは、無鄰菴の裏に江戸時代の『名勝図会』の絵があるかと思うんですが、それを見ながらお聞きいただきたいと思います。

そこは、もともとが、いまは瓢亭さんがありまして、その東側に丹後屋さんという湯豆腐屋さんがありました。その後がその無鄰菴、いまの無鄰菴になるわけですけども、ここを明治二七年から、かかっております。この庭をつくるに当たりまして、山県さんから、いろいろとご注文を受けております。

山県さんはこの庭に対して、いろいろとご注文があります。お好みの庭があるんですね。山県さんは、実を申しますと京都の庭は大嫌いです。町家の庭、茶庭、そして、神社仏閣の庭、総じて暗いとおっしゃるんです。この、わびさびの庭が大嫌いなんです。そして、そういうものは形式的である、そういう庭ではない庭が欲しいと。それは、人の住まいというものは、素朴な自然の中に光のある、日の当たる、そういうところに居を構えたいんだというご持論があったわけです。

そこで、庭をつくるのに三つの条件を出されたわけです。一つは、芝生の明るい空間をつくってください。もう一つは、それまでは、マツの木をいっぱい使っていたけれども、そんなマツの木よりも、もっとモミ、スギ、ヒノキ、あるいはヤマモミジをたくさん使ってほしいと。第三番目には、出来たての琵琶湖疏水を使ってもよろしいという、この三つの条件が出されたわけです。

七代目は、その庭をつくるのに一つずつクリアしてまいります。まず芝生でございますが、芝生の明るい空間と申しますのは、当時は鹿鳴館時代でございます。だから、野外パーティー、ガーデンパーティーのできる、そういう空間が欲しいということでした。



名勝図会

現に山県さんはイギリスに政治のことで視察に行っておられます。そのときにイギリスの自然風景的な、そういった庭をご覧になって、そこにある芝生は生活に結び付いた芝生の空間で、そういった空間が必要であったわけです。そのことを考えて七代目は建物の周りを平らに致しまして、そこに芝生を植えております。なるほど、そこには机でも出してティーパーティーぐらいはできます。

ところが、七代目もちょっと頑固なんですね。川から向こうは「築山風」と申しまして、小高い丘に致しております。そういう島をつくっております。本来なら、そこにコケを植えたりすると昔の日本庭園になる

のですが、そこに芝生を植えております。

芝生というのは陽樹でございます。陽樹というのは日を好む木なんですね。だから、そこには大きな木は植えられません。影ができますから。小さな、われわれは「根締めもの」と呼んでおりますが、根元を締める物として、いまではサツキとかツツジとかを植えておりますけれども、昔はお茶とかビササキとか、あるいは、カワラとかキキョウとか、そういうものが植わっていたわけです。そして、そういう空間は非常に明るい、見晴らしのいい空間をつくります。

ところが、その図面を見ていただくと、ここの無鄰菴は三方が道路なんですね。どこからものぞき込まれるのです。だから、塀沿いに目隠しが必要なんですね。そこに木を植えるわけですけども、マツの木を植えてはいけませんということを好まれるというのは実は、昔のその絵を見ていただくと、そこ自体が南禅寺の参道でありましたから、両側には、たくさんマツの木が植わっていたんです。まだ私の子どものころにも大きなマツの木がございましたし、ついこの間までマツクイで枯れるまではマツの木は何本か残っていたんです。

そんな大きなマツの木があるのに、高い金を出してマツを植えても何の意味にもならないわけで、そこにはスギ、ヒノキ、あるいはモミ、あるいはヤマモミジをたくさん植えました。この植え方がよかったんですね。

それまでの京都の庭、町家の庭は、マツの木が一本、スギの木が一本、モミジが一本ずつで混植していたわけです。ところが、ここは広いところですから、スギならスギを一〇株とか、モミジを一〇株とかしますと、そこに、おのずとスギ林、ヒノキ林、モミジ林ができます。

そうしますと、その下が非常に暗いので、こういう暗い下には芝生は植えられないのです。だから、コケを植えております。芝生の明るい空間と、そういう木立の暗い空間が同時に見られるわけです。実は、これが自然なのです。

自然というのは、日が当たれば影ができる、これは当たり前のことですが、このように自然は、まったく違う性質のものが常に同居しています。例えば男と女、あるいは水平と垂直、高いものと低いもの、硬いものと柔らかいのと、常に相反する二つの性質が常に同居しているのが自然なんです。

だから、その形態は、ここで明るい空間と暗い空間が同時にある。まったく相反する二つの性質を限られた空間にバランスよく組み込むのが庭づくりなのです。このバランスというものは、施主の好まれるバランスを入れるのが植治のやり方、手法です。

次に、琵琶湖疏水を使ってもよろしいということですけども、それは、琵琶湖疏水というのは当時の京都の人たちの喜びの水、歓喜の水でありましたが、誰よりも喜んだのは七代目なのです。

私どもの庭づくりは材料に生き物を使っております。花にしても、木にしても、コケにしても生き物を使っております。そうしますと、せっかく丹精込めて庭をつくっても、夏、水を欲しがるのですけども、それまでは水をあげたくても、あげられない、お水がなかったのです。だから、みすみす枯らしてしまうという苦い経験を何度も積んでいました。

ところが、水道水ができますと、これも昔の人は、ひねるとじゃあと言うぐらい瞬時に出ます。その水で、その木が夏に水を欲しがるときに、あげられたんですね。七代目には非常に喜びの水であったわけです。

だから、この無鄰菴では喜びの水を表現致しております。しかも、その水は、この未曽有の、ああいう恐ろしい水ではなくて、平和時の水の表現をここ無鄰菴では表現致しております。

例えば、滝で落ちる爽やかな流れの水と、浅い池でゆったりと流れる水、そして今度は急流をつくって、まるで子どもが、うわあっと駆けていくような、そういう楽しい水とか、または、深い池をつくりまして水をゆったりと休ませております。そういった、いろいろな平和時の水の在り方を、ここで表現致しているわけです。

でも七代目が一番、苦心したのは、この地形にありました。垂直三角形という非常に造園のしにくい地形なんです。本来なら山県さんにお願いして、もうちょっと土地を何とか買ってもらって、いい形にしてほしいのですけども、三方が道路ですから、これはどうしようもないんですね。土地修正ができない。そこで仕方なく視覚修正というものを致しております。目で見て修正致します。

例えば一番先端から滝をつくるのですけども、本来、山県さんは軍人さんでいらっしゃいますから、一本落ちの、どんとした滝をすると山県さんに非常に喜んでいただけるんですけど、狭いところに一本落ちの滝をすると、余計先細りした感が致します。そこで、中央、右、左と三段落ちの滝をつくっており、そこで幅を持たせております。

その次に、そんなに広くない場所に二段落ちのひょうたん池をつくっております。この池は非常に浅い池です。どれだけ浅いかというと、夏に行きますと、石かと思ったら石が動くんですね。亀がはうぐらいの浅さです。

池というのは、深くなればなるほど狭く感じます。浅くなればなるほど広く感じるんです。決して広くなったり狭くなったりするのではないんですよ。感じですね。広く感じたりする。

また、浅くても水面ができますと空が映るんです。そうしますと、そこが光る、明るくなるのです。明るいと広く感じます。暗いと狭く感じるんです。だから狭いところは、できるだけ

三段落ちの滝

Y 字型の合流点

広く感じるように致しております。

また、今度は庭の一番広いところは、この池尻を川に致しまして中央に持ってきております。もう一本別ルートで右から中央へ、そこで合流させるわけです。そういうところに見せ場をつくるわけです。だから、広いところは一点を見て、狭いところは散漫に見るように致しております。

これは水だけではなくて、石もそうしております。石でするのは、まず、この垂直三角形の一番底辺の長いところのど真ん中に、でかいでかい石を据えていますね。どれだけでかいかと申しますと、これは昔から醍醐の山中、山の中に、秀吉の忘れ石というのがありました。それは、秀吉が桃山城をつくるときに、あそこから石を切り出していったんですけど、秀吉をもっても出せない石というのか、もう要らなかったから置いておかれたのか、それは分かりませんけど、秀吉の忘れ石というのがあったと。

七代目は牛何十頭を連ねて、山科からその石を引っ張ってきまして、その底辺の一番ど真ん中に、それを立石として目立つように置いているわけです。そうしますと、一点をそこで見ますから、その距離感をまず、そこへ集中させているわけです。また、この庭の一番広いところに、この横石をべたっと寝かせ

秀吉の忘れ石

ているわけですね。

先ほどの合流地点も、また一点を見させる。そして、その池の一番奥にも、でかい石を置いております。そうしますと、垂直三角形の逆三角形をつくっているわけですね。それと、手前の方にも、でかい石を置いていますので、これで四つの四角い地形を連想させるように致しております。このようにして、この無鄰菴をおつくりするわけです。

次に、この水を使って、平安神宮をつくるわけですけども、その前に、この七代目のことを、ちょっとだけご案内したいと思います。

七代目は幼名が山本源之助と申します。生まれたのは京都の南の方で、向日市神足というところの学者の家の次男として生まれております。小さい時にお母さんを亡くしておりまして、厳格なお父さんに育てられております。

そして、ちょうど新しい明治という時代ができますと、生まれたのが万延元年と申しますと一八六〇年、明治が一八六八年でございますから、そのとき、ちょうど八歳ぐらいになっていたわけですね。

明治新政府では学校制度というものができます。そこも地域制で神足小学校というのができまして、その神足小学校の第一回入学、第一回卒業を致しております。そして非常に勉強をいたしまして、実は優等生で卒業したんです。

京都府におきましては新しい近代京都をつくるために、いろいろな事業をして、いろいろな

施設をつくっています。でも、施設をつくるだけではいけないので、これから新しい知識を持った人を育てようということで、京都府におきましては、いち早く海外留学制度というものを設けました。

海外留学制度を設けるのですけど、誰でも行けるわけではないんですね。よくできるお子さんを各地域から選抜をするのです。実は、この七代目は神足地区から、この選抜に選ばれました。おそらく本人は、ものすごく喜んだと思うんです。ところが、猛反対した人があったのです。一番喜んでいただくべきお父さんが猛反対をするのです。

いま考えてみますと、ちょうど一八七三年というと明治五年のことですけども、ウィーン万博が開かれたわけですね。そのウィーン万博に日本は出展しております。出展物を持っていくのに船で持っていくわけですね。

船で持っていったら、今度は船で持って帰るのですけど、その船が静岡県沖で座礁して沈んでしまったんですね。だから、ウィーン万博に出展した品物と、たくさんの命が奪われたのです。これはニール号事件と言われていますね。そのニュースが非常に日本中に広まっていたわけです。

ところが、フランスに留学すると。本人は、ものすごく喜んでいるけれど、お父さんとしては、おまえなぁ、そんなに喜んでいても死ににに行くようなもんやと。船に乗っていくしかないから、いまのように飛行機や船など選択できませんから。だから、死ににに行くようなもんやから行ったらあかんと言われて、猛反対を受けているわけです。だから、本人も、しぶしぶだったと思うんですけど、やっと納得するわけです。

そして、その二年後というと明治一〇年、一八歳を待って、私の方の家に婿養子に参るわけ

です。婿養子になるということは相手方が必要です。大じいさんに対して、私の大ばあさんですけど、それは小川ミツと申します。そして大ばあさんも、また同じ万延元年一八六〇年生まれです。

私の方は小学校が粟田小学校と申しまして、円山公園に知恩院さんがございまして、その北側が青蓮院、その北側に粟田小学校があるのですけど、そこの第一回入学、第一回を卒業致しました。

実はこの私の大ばあさんも、ものすごく勉強をしまして優等生で卒業するんです。そのとき三人優等生が出られたわけです。あと、お二方は男性でした。あとお二方というのは、一人は稲畑勝太郎さん、一人は横田万寿之助さんです。

稲畑さんも横田さんも、後にフランスのリヨンへ留学されております。特に稲畑さんはそこで染色・染料を学ばれまして持ち帰り、「キ染めの稲畑」として一世を風靡されました。そして稲畑産業の創始者でいらっしゃいます。

その後、南禅寺の奥の方で家を買われまして、七代目に庭を頼まれました。その庭の名前が和楽庵という名前です。それを戦後、宝酒造の大宮庫吉さんが買われて何有荘という名前に変えられました。この名前は、たびたび、このごろ出てくる名前だと思います。

もう一人の横田万寿之助さんは、何か日活だったと思うのですけど、そういう映画の方をされまして、そこで、そういう活動映画に行かれたと聞いております。

わが大じいさんと大ばあさん、頭のいい家系に私は生まれて幸せですけども、どちらもフランスに行けなかったんですね。ところが一八歳同士で結婚するわけです。一八歳同士で結婚するのですけど、二年後に、その大ばあさんのお父さん、七代目で言うと義父が亡くなります。

そうしますと、相続を致しております。相続といっても、いまのように等分に分けるのではなくて、当時は家督相続といって、一人が全ての財産を得るわけです。

でも、全ての財産をもらって喜んでいる場合ではないんですね。全ての責任を持たなければいけないわけです。それは商売のこと、家のこと、仕事のこと、家族のこと、全てのことを家の長として取り仕切らなければいけない。小川家に来てまだ二年目、二十歳という若さ。大変苦労したそうです。

後にこの人に申したことは、あのとき何度、自分は死のうと思ったか分からん、それほど大変だったと。何が大変かと申しますと、商売が大変だったんです。明治一二年というのは皆さんご存じでしょうか。日本人が日本人同士、血で血を争った最後の戦い、西南戦争、西郷さんとの戦いが有栖川さんとあった、そんな政情不安のときに、そんなに新しい庭づくりは、めったに入ってこないんです。だから、仕事がないということで大変困ったそうです。

ところが、ありがたいことに、こうして代々、仕事を致しておりますと、代々のお得意さんがあったわけです。それは、ほとんどが神社仏閣でした。この神社仏閣というのは、七代目にとっては、悩み多い青年のときは非常によかったわけですね。

というのは、神社仏閣は聖地に建っています。もともと聖地に建つものなので、そういうところは何かしら人の心を癒やす、晴れやかにする、そういう場所に神社仏閣があるわけです。

しかも悩み多い青年です。それぞれ行くと、それぞれのご本尊さんが祭ってあるわけですね、神様、仏様が。困った時の神頼みというのでしょうか、そういったところに行きますと、ついつい手を合わす。そうしますと心が晴れるだけでなくて、何か物事が好転していくような気がするんですね。また、それだけではなくて、本当に好転していくわけです。

そうなると一生懸命また、あちこちで拝むのですが、そうすると、それが習慣となりました。習慣となりますと、だんだん敬神崇祖の念が高まってくるのです。神仏を敬い、人を慈しみ、人にも、ものにも優しい心になるのが敬神崇祖の念です。

そういう心で、そういうお寺や神社仏閣に行ってお仕事をしていると、そんなに忙しくありませんから、時間はゆったりあるんです。そういうゆったりした気持ちでものを見ると、いままで見えなかったこと、または感じなかったことが見えてきたり、分かってきたりするんですね。

例えば、自分が踏んづけている雑草であっても、昭和天皇さまが「雑草という草はない」とおっしゃった通りなんです。それをもっと見ようと腰をかがめて、その草を見ると、それぞれに名前があることや、それが双葉から成長して花を咲かせ、実を付け、かわいい、そこに生涯があることが分かるわけですね。

また、そういう草だけでなくて、そこにうごめく昆虫とか、あるいはアリなんかは、ただ、うごめいているのではないんですね。あれは一生懸命、生活するために働いているのです。そういうものを見ると、だんだん、そういうものをいとおしくなりまして、一木一草を大切にする、そういう心が、そのとき、できてきました。

明治一〇年代は七代目にとっては非常に困難な時代であって、いろいろな難問が来るわけですが、それを逃げずに一つずつ対処することによって、どんどん解決していくことによって自信が湧くことと、それと同時に、それまで以上に、大きな大きいな心の器になっていったわけです。

だから、明治一〇年代は苦難苦労の十年間だったのですけども、試練の一〇年代でもあったのですね。ところが、そのときに一木一草を大切にする心、これは造園家に一番大切な心です。それと同時に人の心の痛みの分かる、そういった人間になっていきました。

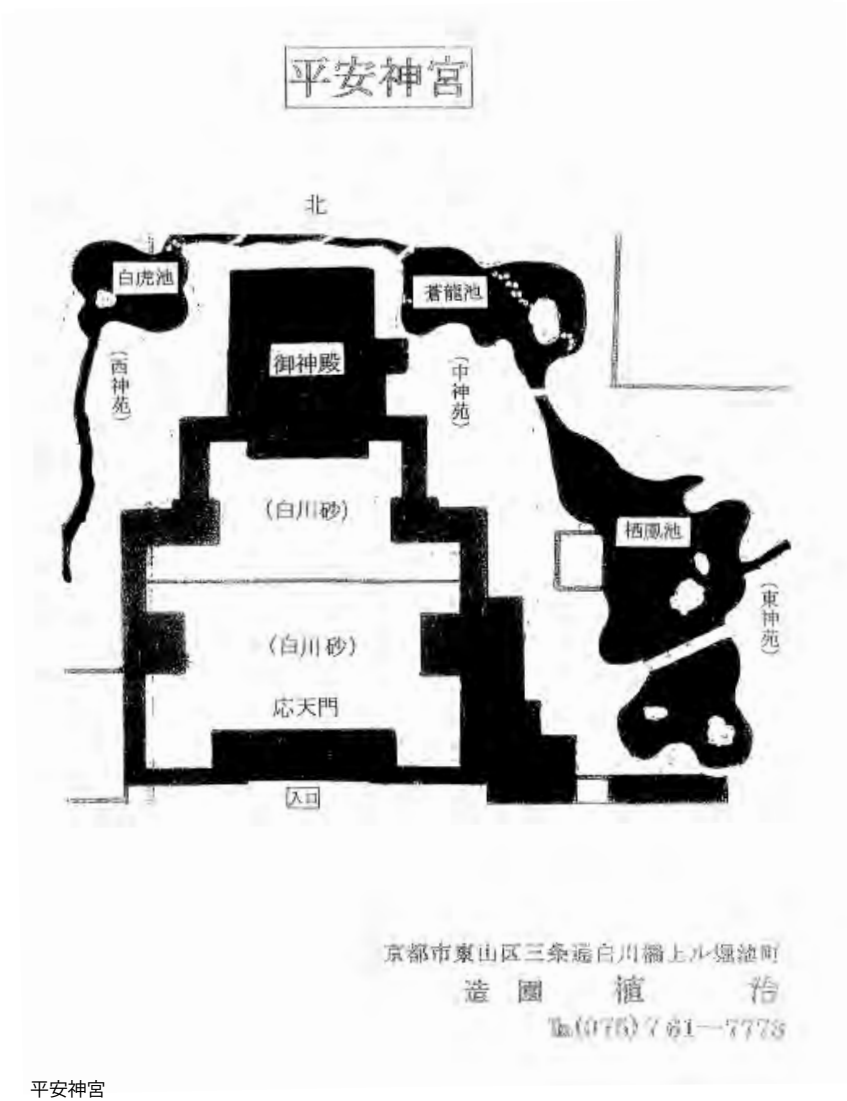
明治二〇年になりますと、いっぺんに物事が好転していきます。次々に新しい仕事が入ってきます。京都自体が活気を取り戻したのです。それと同時に次々にお仕事が入ってくる。それは先ほどの無鄰菴だったり、常に非常に心を正しくしておりますと、神主さんからお仕事をいただくわけです。

どういうことかと申しますと、そのときに、その琵琶湖疏水を引きまして、いち早く水道をつくるご事業をなさったり、あるいは電気をおこす事業をしたり、そして物を運ぶ運河のそういう事業をしておられる方々は、実は明治の人なんです。明治の人といっても明治生まれではありません。それ以前に生まれた方なんですね。そういう方々は、もともと都人でした。

ところが、こういう方々は途中で都がなくなってしまって、都人でなくなってしまったわけです。非常にわれわれが思う以上に寂しい、悲しい、あるいはプライドを傷つけられたような、そんな気持ちになっておられました。

ところが、明治二八年というのは、京都がつくられて一一〇〇年目の節目の年を迎えるわけですね。そこで、なんとか千年間、都があったという証をとどめておこうという市民パワー、住民パワーにより京都を御創建された桓武天皇を祀る神社をつくろうということで生まれたのが平安神宮です。

平安神宮をつくられるわけですけれども、その平安神宮の庭を頼まれます。でも平安神宮の庭とは申しません。ご神苑と申します。ご神苑とは神様のご領域でございまして、神様がお遊びになる、あるいはお散歩される、そういう場所を申します。それをつくれということです。



平安神宮

神のご領域をつくれということですね。そんな仕事が入ってきたわけです。これは、えらいことなんですね。

現在におきましては、このご神苑は、その図面を見ていただきますと、大きな三つの池を持つ、大きな庭を構成致しております。そして、それぞれの池は川で結ばれております。その池に、あの琵琶湖疏水の水が流れ込んできているわけです。

ところが、この水は、ここで止めるとえらいことですね、どんどん入ってきますから。まず、また、この疏水へお返し致しております。そして、疏水へお返しした水は鴨川、淀川、そして大阪湾、いずれは太平洋に流れていきます。

いまのは人工川であるのですが、本当の琵琶湖の水というのは南郷洗堰から宇治川、そして淀川、大阪湾、そして太平洋に行くわけです。これは人工川であっても琵琶湖の支流に違いないのです。いっとき、その琵琶湖の支流が平安神宮の庭を通るという、こんな壮大な庭をつくってしまったわけですね。

この水は、それだけではないんですね。水というものは液体になったり、気体になったり、固体になって、ぐるぐると地球を回っています。この生きた水が使えて庭づくりをしたわけです。こういう壮大な庭をつくったのです。その時代が、そのような時代であったのです。

徳川二七〇年というのは、封建時代を維持するために徳川幕府は、いろいろな政策を取っております。対外的には鎖国をし、国内的には士農工商という身分制度、あるいは宗教の弾圧、思想の弾圧、人々をがんじがらめにしていたわけですね。自由というのは与えられた仕事があって、そして、心の中の自由はあったわけです。

だから、その徳川二七〇年というのは、いま考えてみますと非情な時代であったのですが、

素晴らしい時代でもあったのです。それは、与えられた仕事を脇目もふらずに一生懸命なさいという二七〇年であったのだけど、それは、どんどん内へ内へと精神力を高めていく、そういう時代であったわけです。それが、いまの伝統文化、伝統産業が、そのときに培われたわけです。こういういろいろな、内へ内へと心の中をのぞき込んで、ミクロの世界に入っていくわけです。

でも、先ほどの『龍馬伝』の時代の人は、もう、それには耐え切れずに爆発させたわけですね。そして、開国日本、新しい時代を迎えます。

私はよく、それを扇子に例えます。それまでは扇子が閉ざされていた時代だったと思うんです。ところが、いろいろなものをためこんで新しい明治という時代を迎えたとき、その扇子が開いたわけです。扇子が開くのが、ばらばらにならないのは要があるからです。

この要というのは、それまで一生懸命ためこんできた、それぞれの人たちは、いろいろな志をそれぞれ持っていたわけです。医学を志す、文学を志す、あるいは政治を志す、いろいろな志が、その要でありました。

その要を持った扇子を開いたわけです、扇子というのは骨組みが有り、それをアンテナ代わりに外国に行って、見るもの聞くもの全てを自分の志に置き換えて、そして持ち帰って、それを花開かせたのが明治の人たちであったわけです。その時代の人たちの、そういう精神が、この平安神宮の庭に生かされているのです。

この大きな大きな平安神宮の三つの池には名前が付いております。白虎池、蒼龍池、栖鳳池と名付けられたこの池に、あの琵琶湖疏水が流れてきています。琵琶湖疏水というのは、一つは先ほども何度も申し上げているように、生活用水、水道となる命の水、二つ目は電気をおこす科学の水、三つ目は物を運ぶ運河の水でありました。

白虎池

蒼龍池

そこへ七代目は、もう一つ加えております。都人の夢であった、この水を使って初めて庭づくり、文化の水を加えております。その四つの用途を持った、この水が大きな池に満々とたたえられているわけです。これは、まず感謝して、神様にお供えしていると同時に、それからの京都の発展と平和と安全を願っての、実は祈願の水でもあったわけです。

こういったものは、この庭はご社殿の裏につくられております。ご社殿の前というと、本殿の前、赤い楼門、大手門というものがあります。そこが広い空間になっており、そこには、あの白川砂が、たくさんまかれているのです。

その白川砂がまかれているということは、白という色は人の心を浄心させるお清めの砂でもあるわけです。それと同時に平安神宮の建物というのは皆さんもご存じのように朱塗りで、赤いんですね。赤と白、非常に紅白、めでたい明るい空間をつくっております。また、先ほどご案内したように、古来、都人が枯山水のときに、実はこの白川砂、水に見立てた砂でもあったわけです。

こう考えてみますと、ご社殿の前を都人のつくった見立ての水であったかも分かりませんが、その水で神様にお供えし、後ろは明治の人たちの偉業でつくられた琵琶湖疏水の水をお供えしているのです。そうすると、神様をぐるっと水で取り囲んで、お守り、お供えすると同時に、千年

間、都人が水で、飢餓で苦しんだ、その思いを癒やす水でもあったわけなのです。

このように七代目は、それ以降、たくさんの琵琶湖疏水の水を使って南禅寺界隈、あちこちに庭をつくっております。その中でも、この平安神宮、そして先ほども申しました山県有朋公の無鄰菴、そして円山公園もそうです。それら南禅寺の奥の方に市田弥一郎さんのお宅がございます。対龍山荘と申します、その庭も。そして、いま京大管理になっておりますが、百万遍の西園寺公望公の清風荘。

この五つが、この京都だけでも国の名勝指定を受けておりまして、全国で庭をおつくり致しております。東京の古河庭園、あるいは滋賀県の長浜にございます、盆梅で有名な、浅見又蔵さんの慶雲館、この二つも国の名勝指定を受けております。個人で七つも国の名勝指定を受けているのは造園史上、七代目だけでございます。このように、そのほかにも、たくさん庭を残しまして、現存するものは、ほとんど、その都市、まちの指定を受けております。

たくさんの庭を残しまして昭和八年、七四歳をもって他界します。他界するときに申したことは、「京都を昔ながらの山紫水明の都に変えたいものだ、皆さん、ごきげんよう」というのが最期の言葉でした。

ところが、この言葉を知るのはその三三年後、私が知るのは、昭和四〇年のことです。その七代目の三三回忌をしたとき母からそのことを聞いたのです。その翌年から、私がこの仕事を始めました。

昭和四一年というと、まだ、この七代目を知っておられるお得意さんがおられまして、私が仕事へ行くと、「まあ、ぼん、よう来たな」と言って。まあ皆さんぐらいですから、ぼんと呼ばれていたんですけど、ぼん、よう来たなと。もう仕事どころか上がれ、上がれということで、

その方が、この七代目のことやら、いろいろお話の中で、昭和八年は、そんなに、いまのように山の乱開発もなく、この京都自体が山紫水明の都だったとおっしゃるわけなんですね。それは京都だけではなくて、日本も世界も青い地球だったということです。

ところが、私が仕事をしまして昭和四五年、皆さんは、まだ生まれていないと思うんですけど、大阪万博というのがありまして、そのころから、日本列島改造論の下に新幹線はできる、あるいは高速道路ができる、そして、どんどん衣食住、非常に、われわれは豊かになってきたわけです。

豊かになるんですけども、この便利さと豊かさと引き換えに、この地球規模で、われわれの周りから、どんどんと自然、いや、緑が奪われていきました。それは、京都だけではなくて、日本だけでなく、全世界でそうであったのです。だから、いま地球が非常に温暖化現象、異常気象として、われわれに警告を発しているのです。警告を発しているのですけども、私は、その地球から自然が奪われた分だけ、どうも人の心の自然が奪われているのではないかと思うのです。

昨今見るニュース、親が自分の子どもを虐待したり、逆の場合もあります。ちょっとした利益で人を何人も殺すような記事がよく出ております。また、世界に目を転じますと内乱や戦争が常に行われております。これは、それぞれの人の心、自然の優しい心が奪われているのではないかと。

よく考えてみますと、このかけがえのない地球に、われわれは地球人として生まれてきたはずです。その地球をよくよく見ると、メロンのように、アメリカや、イギリスや、フランスや、日本や、いろいろな国に分かれております。

でも、どこの国の赤ちゃんも、生まれたての赤ちゃんは本当に、つきたてのお餅のように真っ白で柔らかく汚れのない、人にも、ものにも優しい心で生まれてきたはずなんです。それが自然の人間の心だったのです。それを思い出していただくのが一番、この地球を救う一つの手だてではないかと思います。

だから私は思うのですけど、皆さんも常々、大変お忙しくしておられます。でも、時あらば、山にお出掛けください。また、時あらば、海や川に遊びに行ってください。そんなところは行けないという人は、一日いっぺん大空を眺めてください。そして、心が閉塞した時、また悲しいことも、うれしいことも、大空を眺めていると、心が爽快になります。そういう爽快な気持ちになって、お勉強やら、いろいろなことをしていただきたいと思います。

これで私の話は終わります。どうもありがとうございました。

写真「植治の庭」を歩いてみませんか　―洛翠庭園・無鄰菴庭園―（白川書院）

第2回

"Food design"
～ Designing processes ～

ヴィッラトスカ・デザインマネージメントセンター CEO
アウグスト・グリッロ 氏